●「おおいた教育の日」エッセー入賞者

【一般の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）　吉田　道代さん(臼杵市在住)
優秀賞　井上　杉夫さん(大分市在住)
優秀賞　田北　善子さん(日出町在住)

【小・中・高等学校・大学等の部】

最優秀賞（大分県教育の日推進会議会長賞）　岡本　夕佳さん(大分県立大分豊府中学校3年)
優秀賞　本川　茉奈さん(日田市立若宮小学校6年)
優秀賞　長野　裕貴さん(大分県立野津高等学校3年)
優秀賞　三浦　楓さん(大分県立芸術文化短期大学1年)
学校賞　大分県立大分豊府中学校
竹田市立豊岡小学校

「おおいた教育の日」
エッセー

【一般の部】最優秀賞
（大分県教育の日推進会議会長賞）

いじめられっ子だって

吉田　道代

子どもたちの様子を見ていると私はどのような小学生だったのだろうかと思い出してみることがある。決して勉強ができる方ではなかった。授業中先生に当てられて発表もできず、真っ赤になり長い時間立たされたこともあった。そのような子どもがどのように成長していったのだろうか。

幼い頃の私は、いじめられっ子だった。小学校に入学してから小さな嫌がらせを受けるようになった。４年生になる頃には、理不尽な言いがかりを付けられたりするようになり、いつしか集団でのいじめへと変わっていった。暴力を振るわれたこともあった。

そのような私を助けてくれたのは、担任の先生だった。祖母に言われて私は、勇気を出し先生に暴力を受けたことを話した。先生は、グループのリーダーを呼び出して注意してくださった。しかし、そのようなことでいじめが終わるはずはなかったのだ。私はいじめっ子に、先生に告げ口をしたと再び呼び出された。普通だったらきっと怖くなり諦めるのであろうが、私は祖母の「先生が助けてくれる」という言葉を信じて、仕返しのことも先生に打ち明けた。諦めずに何度も先生に話したことで、その子は私をいじめなくなっていった。

いじめられなくなったからといって、すぐに私自身が変わっていったのではない。集団からいじめられたことによって誰も助けてはくれない、自信の持てるものなど何もないと思っていた。

しかし、そのような私にチャンスが巡ってきたのだ。学芸会の劇のピアノ伴奏。ピアノなど習ったことのない私だったが、家にあるオルガンで懸命に練習した。ピンクのブラウスに紺のジャンパースカート。ピアノの前に座った時の緊張感は今でも覚えている。今思えば、私にとってあれは、大きな一歩だった。

今年の初め帰省した折、母から私の小学生の時の通知表を渡された。何事にも消極的で、勉強に対しても意欲を持てなかった当時の私の様子が書かれていた。それと同時に、いつも私がうまく友達と関わることができなかったことが書かれていた。このような所にまで心を配り見守ってくださっていたのだ。あの時先生が、私よりもピアノの上手な子がいたにもかかわらず私を選んでくださったのは、私に自信を持たせてあげたいという気持ちがあったのだということに、今になって気付かされた。

子ども同士の単なるトラブルとして簡単に流してしまえば、それまでであっただろうが、その子の痛みに寄り添って、その子の力になってあげたいという先生の思いがそこにあったのだ。先生を含め周りの大人がその子の苦しみを自分自身の苦しみとしてとらえるならば、見て見ぬ振りはできないだろう。

今、理解できない苦しみを与えられている子どもたちへ。助けを求めることは、何も恥ずかしいことではない。親に心配をかけるからと何も言わずに苦しんだりしなくていい。親や自分の周りの大人に、もっと甘えればいいのだ。

当時いじめられている私を見て「かわいそう」と言ってくれていた友人がいたそうである。味方なんて誰もいないと思っていた私にとって力となった。一緒に立ち向かわなくてもいい。善悪の判断が正しくつくということは、とても大切なことである。自分一人で動くことは難しいかもしれないが、そのことを周りの大人に話していれば、何か手立ては、あるかもしれない。その勇気が救いになるかもしれないのだ。目を背けないで何ができるか考えてほしい。

こうして振り返ってみると、私一人の力で乗り越えてきたのではなかった。私の周りの大人や先生、友人が気付かない所で私を見守り支えてくれていたのだ。遅くなってしまったが、みんなに伝えたい。

「ありがとう。今私は、皆さんのおかげで、胸を張って生きています。」

「おおいた教育の日」
エッセー

【一般の部】
優秀賞

母から教えられたこと、母に返したこと

井上　杉夫

最近、児童の虐待死やいじめによる自殺死の報道を目にします。かけがえのない命があまりにも簡単に失われてしまう現実に、私達はいつの頃から自分以外の者の痛みを感じられなくなったのかと考えずにはいられません。

私は十歳の時に父を亡くし、母は土木作業員をしながら私達兄弟を育ててくれました。父が亡くなった後の生活は経済的に苦しかったと思いますが、母はいつも笑顔を絶やさず、私達に辛さを感じさせないようにしていたことが、大人になってから分かりました。経済的な事情で高校進学は難しいと思っていましたが「警察官になって人の為に働きたいので高校に行かせて下さい」と母に頭を下げました。この時も母は「何とかなるやろう」と私の背中を押してくれました。

私が進学の為に親元を離れる時、母は兄弟三人を集めてこう言いました。「これから先もしもあんた達が人様に迷惑をかけるようなことがあったら、あんた達を殺して私も死ぬからね」父が亡くなってから五年、決して苦しさを見せなかった母の覚悟をその時に知りました。そしてその時から、私の歩むべき道をはっきりと心に刻みました。

警察官になって七年後、私は千葉県にある成田空港の警備に従事することになりました。成田での任期は一年でしたが、前年に警備中の警察官にけが人が出たこともあり、普段は気丈な母も「あんたが行かんといけんのかい」と不安を隠しませんでした。当時は携帯電話もなく、任期中は母とも殆ど連絡が取れませんでしたが、無事に任期を勤めて大分に帰ってくることができました。

それから五年位が経ち、実家に帰省中のある日、母が何気なく「交通事故の後遺症が悪いがなあ」と言ったのです。母が事故に遭ったなど初めて聞くことだったので驚いていると、私が成田にいる頃事故に遭ったものの心配させまいとして知らせなかったというのです。それを聞いた時、自分でも思いがけない感情がわき上がり母を怒鳴りつけてしまいました。「事故を知らせんかったちゃあ何事か。俺は親父の死に目に遭うちょらん。あんたにもしもの事があったら親父に合わせる顔がねえ。親子兄弟に心配かけんで誰にかけるんか」母に対して生まれて初めて声を上げながらも、母の苦労と思いが分かるだけに、私は涙が溢れ顔を上げることができませんでした。

この時以来、私は自分から母に心配をかけることにしました。持病の喘息で発作が出たことも、柔道のけがで後遺症が残ったことも全部話しました。そうすれば母も私に心配をかけやすいと思ったからです。それともう一つ、自分の誕生日の朝母に電話をするようになりました。「おはようございます、今日誕生日です。僕も家族も元気です」その電話を受けた母は、私が仮死状態で生まれたことや小児喘息の発作で夜中に何度も病院に連れて行ったこと等を話します。去年と同じ話を、一昨年も話した事などまるで覚えていないかのように話します。その話を私は、毎年初めて聞くように相づちをうちながら聞いています。

高校三年になる私の一人娘は、パティシエになる夢を叶える為に来年大阪に出る予定です。その娘に私は、ボケとつっこみができるようになることと、誕生日の朝に母に電話するようにと書いた手紙を渡しました。電話の相手が父親でないのはちょっと弱気かなとも思いますが、娘もまた、その電話を通じて親の思いを知り、命の大切さと家族の絆を忘れずにいて欲しいと思います。そして私には、時々心配をかけてくれればそれで十分です。

若い皆さん、皆さんが今生きていることには、言葉に尽くせない親の思いがあります。そして、皆さんの周りの人達も同じ思いを受けながら存在しています。どうか人に迷惑をかけず、家族の絆を大切にして信じることで、豊かな人生を築ける大人になって下さい。

「おおいた教育の日」
エッセー

【一般の部】
優秀賞

子供達の豊かな成長のために

田北　善子

先月大分に住んでいる長男の孫２人が帰って来て、仏壇にお参りした時の事、台所にいた私に、

「おばあちゃん、ひいおばあちゃんに、御飯とお茶とお水をあげてください。」

と駆け寄って来ました。その仕草のかわいいこと。今年４月に亡くなりました義母が生きていたら、どんなに喜ぶだろうと目頭が熱くなりました。義母との同居生活は37年でしたが、義母は神仏や先祖をとても大切にする人でした。朝一番、炊き立ての御飯を御仏飯として供え、「上げん罰より、下げん罰」と、供えたらすぐに下げ、それを自分の朝食や昼食の足しにと、一粒一粒の御飯をそれはそれは大切に食べておりました。亡くなる前には認知症を患いましたが、最後まで神仏にお参りをすることは忘れませんでした。この義母の後ろ姿から、祖先を大切にするという「目に見えなくても、人として大切なものを大切にする心」を教えていただきました。

今から32年前、結婚して５年目に、交通事故で主人を亡くしました。残された子供は、４歳、２歳、生後34日の３人。これからどうする事が主人や両方の両親が喜ぶだろうかと何度も考え、年老いた主人の両親を自分の親と思い、３人の子供達が父親の事を忘れないよう育てていこうと固く決心しました。このような気持ちで子供達と接する中、朝夕仏壇の前で手を合わせながらあいさつし、人様から何か頂いた時には、「お父さん、これもらいました。開けてもいいですか。」と報告する事が、自然と身につきました。

当時４歳だった長男も結婚し、２人の子供に恵まれ、数年間県外で過ごしておりました。その頃長男の嫁が、

「お義母さん、お義父さんの写真をくれませんか。マンションの部屋に飾って、家族でお参りをしたいのですが。」

と言ってくれました。私はとても嬉しく、主人のとっておきのいい顔の写真を探して、嫁に渡しました。それから現在まで、家族４人で亡き主人の遺影に毎日御飯とお茶、お水を供え続け、お参りを続けてくれているからこそ、孫２人が先月のような行動をとってくれたのだと、改めて長男夫婦へ「大切な心」が伝わっている事に、有難い気持ちになりました。

昨年の東日本大震災の折、多くの方々が津波被害に遭われました。このような記事を新聞で読みました。若い御主人が、奥さんと子供さん２人を津波で失い、自分だけが助かった事で自分を責め、悲しみにうちひしがれていた時、その方のお母さんから「あなたが生き残ったという事は、嫁も孫２人も、御飯を下さい、お茶、お水を下さいとは言わないけれど、毎日毎日あなたが御飯をお供えし、見守り続けていく責任があると思うよ。」と言われ、生きる気力を見出したのこと。その奥深い言葉に触れ、私は涙が溢れてとまりませんでした。

今夏義母の初盆を迎え、先祖の霊をお迎えする仏壇には、古くから伝わる胡瓜で作った「馬」と茄子で作った「牛」をお供えしました。これは「馬に人が乗り、牛に荷物を載せる。」「先祖の霊がこの馬に乗って早く来て、牛に乗ってできるだけゆっくり帰って欲しい。」との願いが込められているという事です。初盆を無事終え、今こんなに穏やかな気持ちで毎日過ごせるのは、亡き義母がたくさんの苦難を乗り越え、家族を支えてくれたおかげと思わずにはいられません。

10月２日には、亡き主人の三十三回忌の法要を迎えます。これまで、先祖代々誰が欠けても今の自分が存在しなかった事を思いますと、改めて先祖に感謝の気持ちを抱かずにはいられません。亡き義母が残してくれた、たとえ目に見えないものであっても「先祖を大切にするという心」を、子供達や孫達に伝えていきたいと思います。

【小・中・高等学校・大学等の部】最優秀賞
（大分県教育の日推進会議会長賞）

バリアフリーな人付き合い

大分県立大分豊府中学校 3年　　岡本　夕佳

高校野球の大会が始まる時期になると、ふとある友人のこと、そしてその家族のことを思い出す。友人の家族、そしてその兄のことだ。この人たちとの出会いは、私に欠けていた、人付き合いとは何かを教えてくれた。

その友人の兄は、いわゆる「逆子」だった。出産時に脳性マヒと診断され、周りの介護が必要な生活を生まれながらに強いられることになった。その子育ての始めの頃は、大変な苦労をされたとの話を友人から聞いたことがあった。

初めて私がその友人の家に遊びにいったとき、表情は出さなかったものの、内心かなり驚いていたことを覚えている。初対面の際、二足歩行ではなく、車イスでの動きならまだしも、どちらかというと這うようにして近づいてきたときは、自分がどのように対応してよいのか焦ってしまった。私は肩に手をのせられた時、ひょっとしたら後ずさりしてしまったかもしれない。

もちろん、友人からいきさつを聞き、私も頭で理解したものの、感情面で受け入れるには時間がかかったのも事実だった。

その人と近づけたかなと思えたきっかけは、その兄が近所の子どもたちの野球の審判をやっている姿を見かけたときだった。何気なく友人と歩いていると、友人の兄が車イスに座り、的確に、生き生きと判定をやっていた。その周りで一生懸命にやっている子どもたちだけでなく、その兄もいつもよりずっと楽しげだった。まるで一つのチームのような雰囲気だった。そんな屈託のない活動の様子を見ていると、自分はいったい今まで何と余計な考えにとらわれていたのか、とがく然とした思いだった。

当時、「偏見」という観念は全くなかったと今でも信じているが、何らかの「違い」を必要以上に意識して向かい合っていたのだということに気づいた。「自分たち」などと自分勝手なカベを築いていた。でも実際には思い込みだけで違いなんてそもそもないものなんだ。そう気づいた時、自分の周りの視界が広がるんだと感じた。

それからというもの、以前にも増して野球自体にも興味が出てきた。もちろんもともと好きではあったのだが、バリアフリーな人付き合いを私の目前で示してくれたスポーツの存在が気になり始めた。よく世間でいう「スポーツには国境がない」というフレーズ。その言葉は私にとっては、国レベル等の広く遠い存在ではなく、もっと身近で隔たりのない人間関係を築く「カギ」となった。今でも何か世間で人権問題や文化摩擦などを目にする度に、自分の頭の中にひとりでに浮かび上がってくる行動基準となっている。

あとで聞いた話だが、その友人の親御さんは友人の兄のことを事あれば、「才能もあり、誇りに思っている」と家族内でも話をするとのことらしい。学校外の、家族という小さな単位での、すばらしい人間教育が身近にあることを、私はどこかうれしく思っている。

「おおいた教育の日」
エッセー

【小・中・高等学校・大学等の部】
優秀賞

骨折に気づかされたこと

日田市立若宮小学校 6年　　本川　茉奈

私の住む日田市には、観光祭という祭りがある。音楽パレードには、市内の小学校が出て、もちろん私も出る。だが、その２日前のことだ。うんていで遊んでいた私は、うっかり手をすべらせ、うんていから落ちたのだ。しかも、その時、手をついてしまい左手首を骨折。がっかりだ。２日後は、パレードなのに。

次の日、学校へ行くと、私をみてまず、

「あー…。」

と、いうような言葉をみんな言う。先生も、

「明日は、どうする？」

と、私の不安を大きくする様なことを言う。それは、私だって骨折して出る事は、無理だと思っている。だって私のパートはバトンなのだから。ふつう、すべてを片手ですることは、できないと思うだろう。私は絶望していた。

そんな時、お母さんが、

「できる所だけでも片手でやればいいやん。左手で回すところは、オリジナルのふりつけを作ったらどう？」

と、言われて、私は納得した。でも、少し、はずかしい気もした。だけど、納得して、出る事に決めたから、みんなに追いつこうと思い、必死で練習した。

心配してくれる友達に、私はきっぱりと、こう言った。

「片手で出る。」

いよいよ本番当日、若宮カラーの若葉色ユニフォームを着て、市役所へ出発する。もちろん、パレードに出るみんなで行く。他の学校の鼓笛隊が見えると、ドキドキしてきた。でも、一番は、骨折の心配だ。

そして、私たち、若宮小学校の出番。と、思いきや一番最後だ。私は、他の学校が次々と出発する中で、すごくドキドキしていた。一番最初の学校から、１時間ぐらいたつと、とうとう私たちの出番だ。出発地点に用意して、いよいよ出発だ。道に出ると、

「かわいそう。」

と、言っている声が聞こえる。私を見ると、みんな言う言葉だ。だから私は、

「どうせ言われるなら、最後までやり切ってみせる。」

と、いう気持ちになった。でも、言うのは勝手だが、言われる側は、とても傷つく事に私は気づいた。

そして、パレードが終わると、学校に帰る。その途中で、学校で、みんな私を助けてくれた。だから私は、困っている私を助けてくれる友達がいる事にも、気づいた。他にも私をはげましてくれた。応援してくれた。手伝ってくれた。

骨折することは、いいことではない。でも、骨折した事で、周りの温かさ、ちょっとした言葉で傷つくことに気づいた。そして、周りの人に、ある意味、骨折にも、感謝している。

「おおいた教育の日」
エッセー

【小・中・高等学校・大学等の部】
優秀賞

福祉の現場で考えたこと

大分県立野津高等学校 3年　　長野　裕貴

私は高校で福祉を学んでいる。高校では、3年間で60日という施設実習の授業がある。その現場で、様々なことを経験した。

私は、父が福祉の仕事をしていることもあり、幼い頃から障がいのある方と関わることが多かった。しかし小学生の私からすると、怖い思いが先に立っていたように覚えている。高校に入ってすぐに、障がい者の方がいる施設に実習に行った。その時は普通に接することができ、障がいというのはその方の個性であり、私たちと何も変わりはないのだと実感した。

2年からは高齢者施設に行くことになっている。私は実習先の特別養護老人ホームで、とても大きな経験をすることができた。

実習先に、言語障がいがあって言葉を発することが苦手なため、自分からはあまり話すことがない利用者の方がいた。ある日、その方が牛乳をこぼしたことがあった。私はいつものように台ふきで拭いた。それは、私にとってはごく当たり前のことであり、言ってみれば条件反射のようなものだった。その時だった。いつも無口なその方が「ありがとう」と言ったのだ。その時の「ありがとう」は、学校で友達に言われるものとは違い、私に大きな衝撃を与えるものだった。

話すことが苦手なその方が一生懸命に発してくれた「ありがとう」は、福祉に対する私の考え方を変えるものになった。それまでの私は、福祉という仕事は他の人が嫌がることをさせられる、まったく楽しくないものだと思っていた。しかし、当たり前のことをするだけでとても感謝してもらえるこの仕事は、やりがいのある楽しい仕事だと思えるようになった。

その反対にリアルな介護現場の実態も目にした。人手が十分とは言えず、まず素早さが求められる現場では、介護の方法に疑問を持つような場面もあった。ある認知症の利用者の方との出会いは、特に印象に残っている。その方はトイレに行ったすぐ後に、「トイレに連れてって」と叫ぶのだ。認知症のためトイレに行ったことを忘れているのか、排泄に不安があってそういう行動につながるのかはわからない。でも、その方は毎日のように叫んでいた。職員さんたちはそれを聞きながらも、他の利用者の方の介護もあって、そのたびに声かけに行くわけにもいかない。10人近くの利用者の方を2、3人の職員で対応しなければならないのだからそれは仕方がないのかもしれない。そう思っても、その方の叫び声を聞くと、とても悲しかった。それと同時に、自分が何もできないことがすごく悔しかった。自分の技術が足りないことや「実習生」という立場がひどく悔しかった。

私は高校で福祉の良い面を知り、逆に厳しい現実も経験した。福祉の仕事に就く人が多ければ、こんな問題は起こらないのではないかと思うことも多い。私はこれから福祉についてさらに専門的に学ぶつもりだ。介護実習での経験を元に、様々な制度などを詳しく知ることで利用者の方やその家族のサポートができるようになりたい。

私は今、施設ではなく在宅で最期を迎えたいと思っている。住み慣れた所がいい、というのもちろんだが、施設で暮らすことへの不安もあるからだ。そんな考えを持つ人は少なくないのではないかと思う。そんな不安があるからこそ、将来は高齢者が安心して暮らせる地域や、介護する家族が安心して頼ることのできる施設を作りたいと思っている。そして、将来自分が年老いた時に、「施設で最期を迎えたい」と思うようになるのが私の夢である。

「おおいた教育の日」
エッセー

【小・中・高等学校・大学等の部】
優秀賞

ひとりだけの卒業式

大分県立芸術文化短期大学 1年　三浦　楓

これは少しだけ昔のこと、僕の心に残り、忘れられない思い出だ。

高２の秋、僕は体調を崩して学校を休みがちになっていた。とまらない頭痛、夜はほとんど眠れない。

頭痛と不眠に悩まされ続けてひとつきがたった頃、僕は病院で自律神経失調症と診断された。受験や家族や学校の周りの人間とのうまくいってないことによるストレスが原因だった。成績は高校生になって全然伸びなくなり、家族とは成績や進路のことで揉め、僕は周りの人と仲良くなるのが苦手だったから高校ではあまり友達ができず孤立していた。修学旅行には参加したが、みんな楽しみにしていた高校行事最大のイベントは、僕には楽しめなかった。

修学旅行も終わり、本格的な受験シーズン。僕の気持ちはどんどん弱くなっていった。授業に出ても全然わからない。頭痛と不眠は相変わらず治らない。周りの人はどんどん先へ進んでいるのに自分だけ取り残されているような感覚。僕のストレスや不安は日々積み重なっていった。

冬休みが終わった頃から以前にも増して人が怖くなり学校へいけなくなった。周りからは甘えているだとか仮病だとか言われて本当につらかった。みんなと同じように学校に行けない自分が嫌いで仕方なかった。毎晩、次の日は学校へ行こうと決意しても次の日の朝になると学校が怖くなり、トイレで吐き続けていた。日に日に自分が嫌いな気持ちは強くなり、自分を傷つけはじめた。

そんな生活がひとつき続いたころ、担任から電話が来た。「三浦、体調大丈夫か？」担任はとても心配してくれていた。「はい、明日は学校行きます。」僕はわざわざ電話までしてくれた先生に学校に行けないとは言えず、そう答えていた。

次の日、学校へ行った。授業を受ける。周囲からの視線が怖い、気分が悪くなり、教室を抜け出してはトイレで吐き、保健室へ逃げ込んでいた。結局その日はほとんどを保健室ですごした。

その次の日は、また学校へ行けなかった。その次の日も、その次も…

それからまた学校へ行けない日が続いた。担任から電話があり、このままでは３年生にあがれないといわれた。家族からすごく怒られた。みんな僕のつらさをわかってくれないと思った。

それでもなんとか１時間フルに授業を受けることは難しくても、半分ずつ授業に出席できるように努力した。みんなが春休みの間も課題をやり続け、なんとか高校３年生になれた。

３年生になり、新しいクラス。知らない人ばかりで怖かった。けれど、担任は２年生の時と同じ先生だった。授業は相変わらず半分だけ出て、保健室へ。学校も毎日行くのはつらくて、保健室登校の日が増えた。学年が上がっても全然よくならなかった。夏には、このまま休み続けると卒業が厳しいといわれた。大学受験のときに必要な書類は、欠席が多すぎて書けないといわれた。それでも大学受験がしたい。担任が高卒認定試験を勧めてくれた。この資格をとっても高校卒業の資格をあげれるわけではないけれど、大学受験をすることはできると教えてくれた。高卒認定試験は担任に数学を教えてもらい合格することができた。

初めての大学受験、第１志望校の結果は不合格。

あたりまえだった。授業に出てなかった僕が毎日一生懸命勉強している人たちに敵うはずがなかった。

卒業式、僕は出られなかった。卒業を認めてもらえなかった。

担任が毎日電話をくれた。諦めるなといってくれた。みんなが卒業したあとも僕は補講と課題に取り組んだ。何回も諦めそうになった。何回も保健室で泣いた。それでも先生は見捨てないでいてくれた。

卒業式から１か月近くたった頃、なんとか補講と課題が終わり、卒業が認められた。生徒は僕ひとりだけ、校長室での卒業式。今までお世話になった先生方がみんな握手してくれた、僕のこれからを応援してくれた。

高校生活はつらかった、けれどこの卒業式は僕の中でとても暖かいものとして心に残っている。先生、ありがとう。頑張ります。